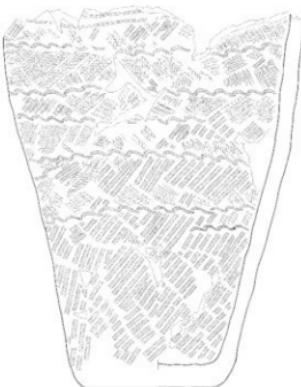
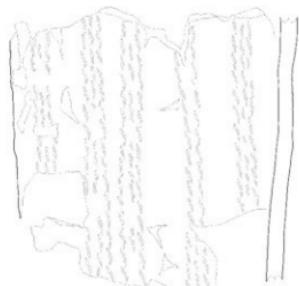




SI2-2



SI2-3



SI2-4



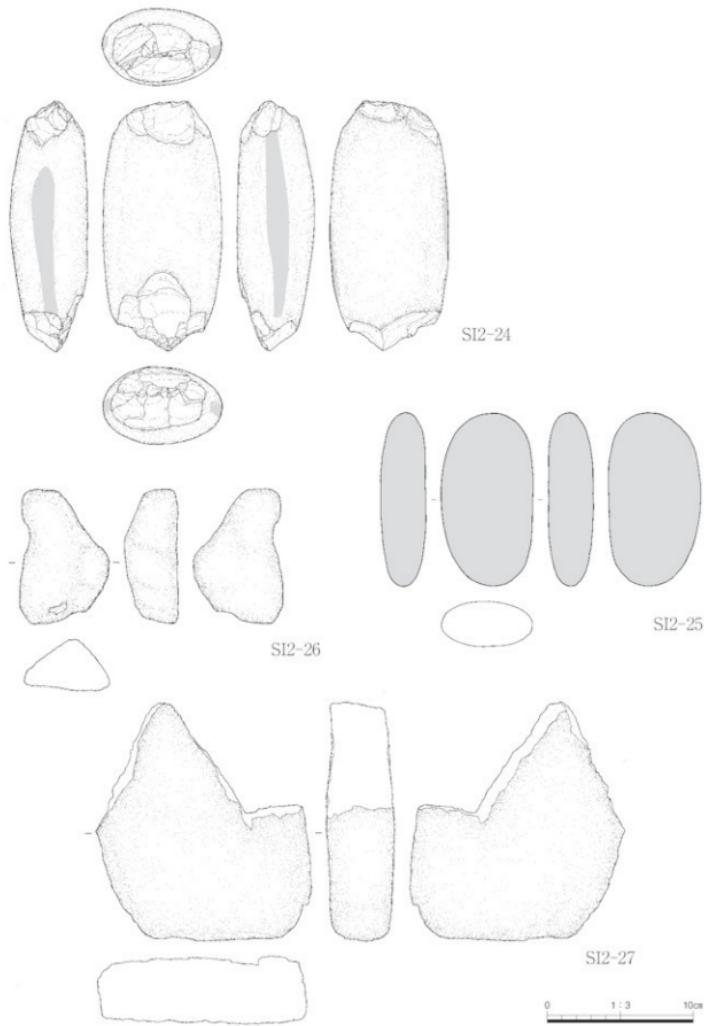
SI2-5

0 1 3 10cm

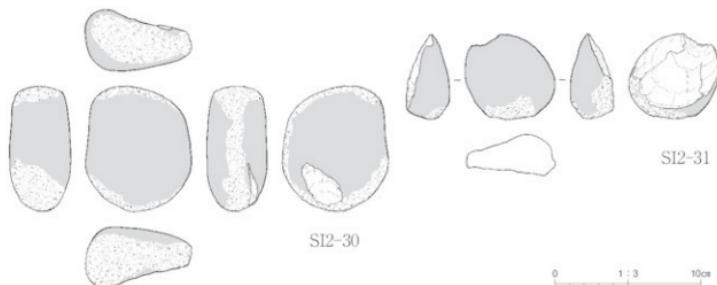
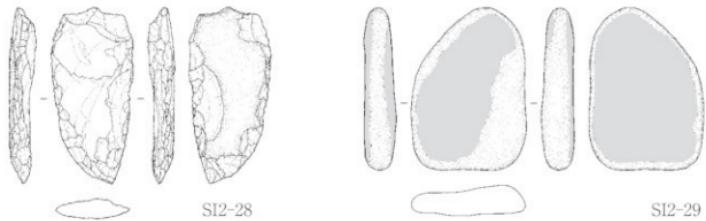
第14図 2号竪穴住居跡出土遺物(2)



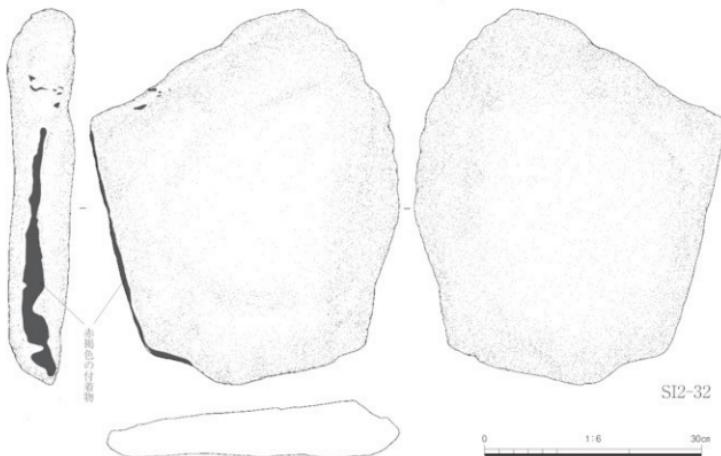
第15図 2号竖穴住居跡出土遗物(3)



第16図 2号竪穴住居跡出土遺物(4)



0 1:3 10cm



第17図 2号竪穴住居跡出土遺物(5)

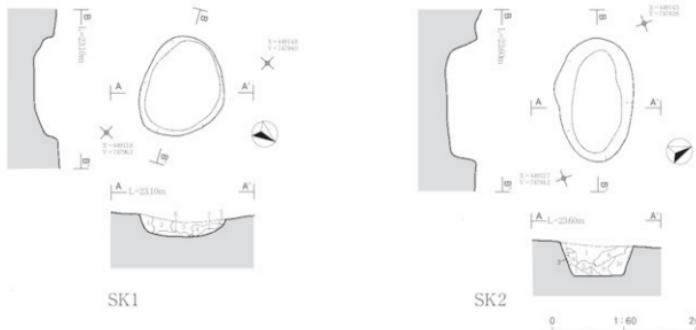
2. 土坑跡

SK1 土坑（第18図、写真図版12・17）

F8 グリット東側に位置する。平面形は円形で、規模は開口部で長径140cm×短径114cm、底部で長径126cm×短径98cm、深さは最深部で22cmを測る。底面は南西側に落ち込むような状況である。底部から壁は外傾して立ち上がり開口部へ至り、断面形はやや逆台形を呈する。7層に分層され、黒褐色土を主体とし、黒色土、暗褐色土が堆積する。遺構内からの出土遺物はない。

SK2 土坑（第18図、写真図版12・17）

F5 グリット東側に位置する。平面形は楕円形で、規模は開口部で長軸170cm×短軸100cm、底部で長軸140cm×短軸69cm、深さは最深部で44cmを測る。底面は平坦である。底部から壁は外傾して立ち上がり開口部へ至る。短軸断面形は逆台形を呈する。10層に分層され、黒褐色土を主体とし、暗褐色土、褐色土が堆積する。遺構内覆土から縄文土器の小片が4点出土した。いずれも深鉢形土器の脇部片である。その内3点を図化した（SK2-1～SK2-3）。



- SK1**
- 1 HOYR2/1 黒褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土 10Y26e-6 明黄褐色土層小・小粒20%入る
 - 2 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y26e-6・5・8 黄褐色土 10Y26e-6 明黄褐色土層小・中粒20%入る
 - 3 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y26e-6・5・8 黄褐色土 10Y26e-6 明黄褐色土層小・中粒25%入る
 - 4 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y26e-6・5・8 黄褐色土 10Y26e-6・6 明黄褐色土層小・中粒20%入る 10Y25e-6 黄褐色土 6×3cm ブロック。
 - 5 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6 黄褐色土層小・粒30%入る
 - 6 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y26e-6・5・8 黄褐色土 10Y26e-6 明黄褐色土層小・中粒20%入る
 - 7 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y26e-6 明黄褐色土層小・小粒2%入る
- SK2**
- 1 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒5%入る
 - 2 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒5%入る
 - 3 HOYR2/3 黄褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6 黄褐色土層小・小粒3%入る
 - 4 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒1%入る
 - 5 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒1%入る
 - 6 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒10%入る
 - 7 HOYR2/6 黄褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 大雑入る
 - 8 HOYR2/3 黄褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・小粒15%入る
 - 9 HOYR2/1 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・中粒20%入る
 - 10 HOYR2/2 黑褐色土 粘性土 繊毛りぬめて湿 草根入る 10Y25e-6・5・8 黄褐色土層小・中粒20%入る



第18図 土坑SK1・SK2 SK2出土遺物

VI. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、石器である。縄文土器は小コンテナ（41cm×31cm×10cm）1箱分、石器は礫石器を主体に小コンテナ（41cm×31cm×10cm）2箱分である。遺構内・遺構外出土遺物を合わせた総重量は、土器が18.22kg、石器が39.97kgである。

1. 縄文土器

遺構外で出土した土器については、文様などの特徴から形式が特定できるものを掲載した。今回の発掘調査では、前期初頭、円筒下層式、円筒上層式、中期後葉～後期初頭の時期のものが確認できるので、次のとおりに分類した。本来ならば平成12年度調査に刊行された報告書において設定された群に基づき分類を行うべきところであるが、内容が異なるものが多いため、今回の報告用に分類して掲載した。

第Ⅰ群 前期前葉に位置付けられるもの（No.1～4 第19図、写真図版17）

1～4のいずれも胎土に繊維が多く含む土器で、1は半截竹管状の工具で押し引きしている。2は口唇部が外削ぎ状で、穿孔がみられる。3は口唇部が平坦である。

第Ⅱ群 前期後葉に位置付けられるもの（No.5～11 第19図、写真図版17）

円筒下層C式～D式に比定されるものとみられる土器片である。5～8は縄文側面押圧、9～11は多軸絞条体が施されている。

第Ⅲ群 中期に位置付けられるもの（No.12～26 第19・20図、写真図版17・18）

円筒上層a式に比定されるものである。14、21、22は同一個体とみられるもので、隆帯にLR縄文側面押圧がみられ、14と22はLR縄文が鋸歯状に押圧されている。

第Ⅳ群 中期後葉～後期初頭に位置付けられるもの（No.27～32 第20図、写真図版18）

27は沈線文と磨消縄文がみられる。28～32は同一個体とみられるもので、頸部がやや括れ、胴部が膨らむ形状とみられる。

2. 石器

出土した石器は剥片石器に対して礫石器の出土量が多い。剥片石器は3点、礫石器35点を図化して掲載した。剥片石器は石鏃、スクレーパー類が出土している。

礫石器については、形狀、形態、二次加工痕、調整痕、使用痕から、石斧、敲石、磨石、敲磨石、礫器の器種名を設けて分類した。

(1) 石鏃 (No.33 第21図、写真図版19)

33は平基無茎の石鏃で、石材は頁岩である。

(2) スクレーパー類 (No.34・35 第21図、写真図版19)

薄片の末端部に二次加工を施している。石材は33が頁岩、34が赤色頁岩である。

(3) 石斧 (No.36～42 第21・22図、写真図版19)

7点出土しており、全て打製石斧である。36は剥離による加工後、表面や周縁部を中心に敲打により整形が施され、表面の先端は自然面が残されている。37は側面に平坦な面がみられ、磨面の上から剥離と敲打がみられることから磨石を転用したことが推定される。両側面を除いた表裏面ともに剥離・敲打の後に磨かれている。38は扁平な大型の薄片の周縁に剥離による加工が施され、表面は連続した剥離により刃部が作り出されている。39

は基部が欠損した先端部で、剥離による加工後の一端に敲打調整、表側の先端部に研磨がみられる。40は基部のみであるが、全面に敲打調整がみられ、表裏面に研磨がみられる。41も基部のみで、一部に磨面がみられるが、剥離より古いものであることから、磨石が転用されたものと推測される。

(8) 敲石 (No.43～49 第22・23図、写真図版19・20)

円窪や扁平な円形窪や楕円窪、長円窪の一部に敲打痕跡がみられるものを敲石として一括した。研磨や磨るという行為が加わった可能性のものもある。43は扁平な楕円形の繊粒花崗閃緑岩の一側面に敲打痕がある。44は石材がチャートの円窪の上下に敲打痕がある。45～47は扁平もしくは扁平に近い円形あるいは楕円形の窪の端部、稜線上に敲打痕が複数箇所にみられる。いずれも敲打に由来する剥離がある。石材は45がハンレイ岩、46が砂岩、47は頁岩である。48・49は扁平に近い楕円形の窪端部の稜上1箇所に敲打痕が確認されるもので、石材は48がハンレイ岩、49が頁岩である。

(9) 磨石 (No.50～56 第24・25図、写真図版20・21)

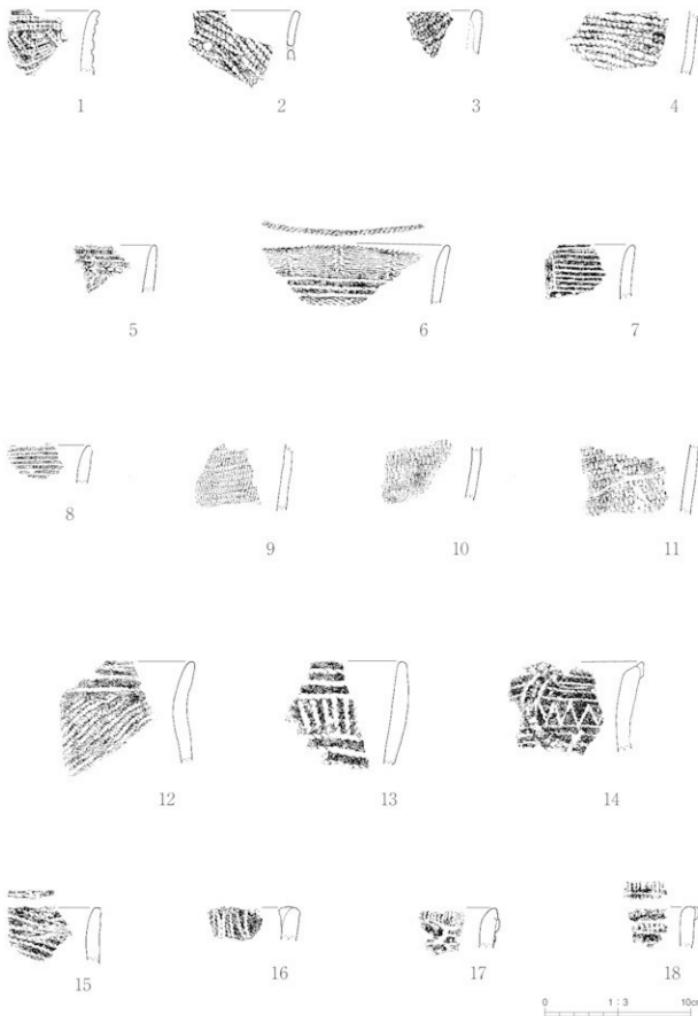
窪の全面や一部に磨面がみられる石器を磨石として一括した。50～53は円形もしくは楕円形の窪の全面が磨かれている。54は扁平な楕円形の窪の表裏面に磨り痕跡がみられる。55は窪の長軸側の二側面に磨り痕跡がみられ、56は一側面のみに磨り痕跡がみられる。石材は50～53がデイサイト、54がひん岩、55が花崗斑岩、56が頁岩である。

(10) 敲磨石 (No.57～60 第25・26図、写真図版21)

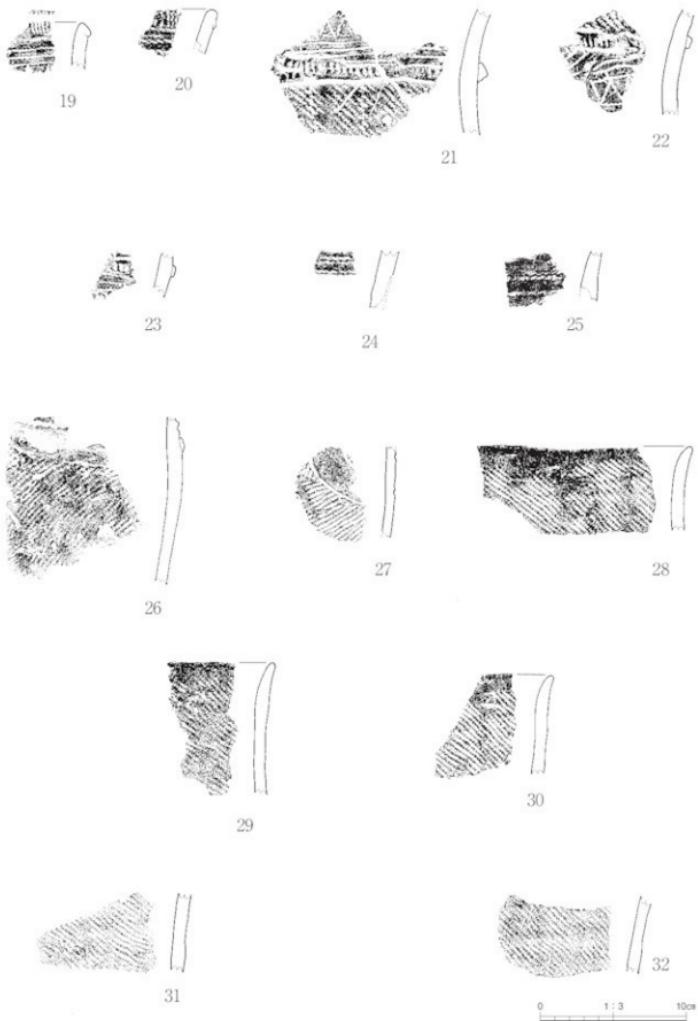
磨石、敲石は使用痕がそれぞれ単独で観察されることから器種設定したものであるが、敲打の痕跡と研磨や磨り痕跡がみられるものを敲磨石として一括した。57は扁平な長円形のハンレイ岩の窪全体が研磨され、長軸側両端の稜上に敲打痕があるので、敲打に由来する剥離がある。58～60は全面に磨きの痕跡がみられ、端部や周縁部に敲打痕があるものである。58は下端部の稜上、59も端部稜上に敲打痕が観察される。60は周縁部に断続的に敲打痕がみられる。石材は58・59がデイサイト、60は細粒花崗岩である。

(11) 繪器 (No.61～70 第26～28図、写真図版21・22)

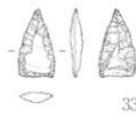
大型の薄片や窪に、連続的な剥離による加工を施し、刃部状のような部分を作り出しているものを繪器として一括した。61は表面が自然面で占める大型の薄片の両面に剥離による加工が施され、左側の側縁部の中央に磨り痕跡がみられる。62は板状の窪の周縁を剥離による加工を施している。63は扁平な楕円形の窪の周縁部を連続した剥離による加工を施して刃部を作りだしている。裏面は全体に剥離より古い磨きの痕跡がみられる。64は窪の一端を粗く打ち欠いたチョッパー状の繪器である。65は大型の薄片の周縁を剥離による加工を施している。66～70は扁平な円形あるいは楕円形の窪の片面に連続的な剥離による鋭利な部分が作りだされている。石材は61・64・68がホルンフェルス、62・65が頁岩、63・66・70が細粒花崗閃緑岩、67が砂岩、69が細粒花崗岩である。



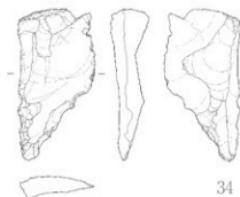
第19図 遺構外出土遺物 土器 1~18



第20図 遺構外出土遺物 土器 19～32



33

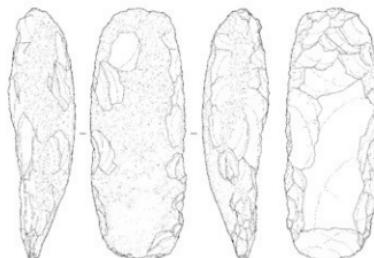


34

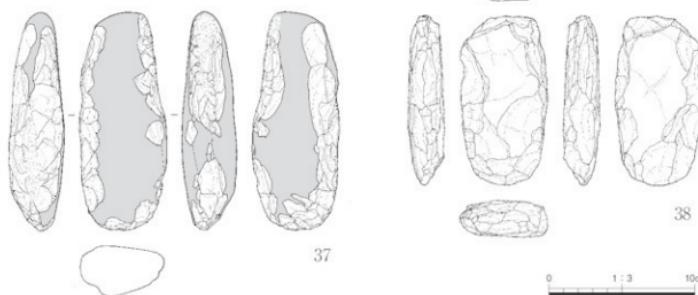


35

0 2:3 5cm



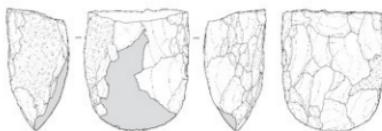
36



37

0 1:3 10cm

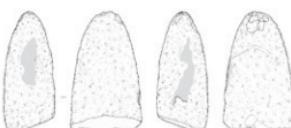
第21図 遺構外出土遺物 石器 33～38



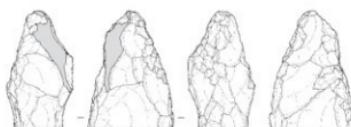
39



40



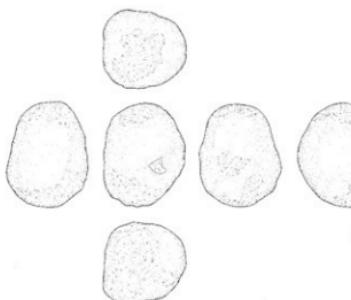
41



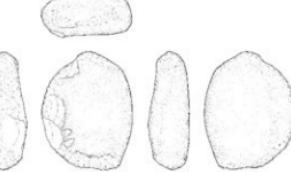
42



43



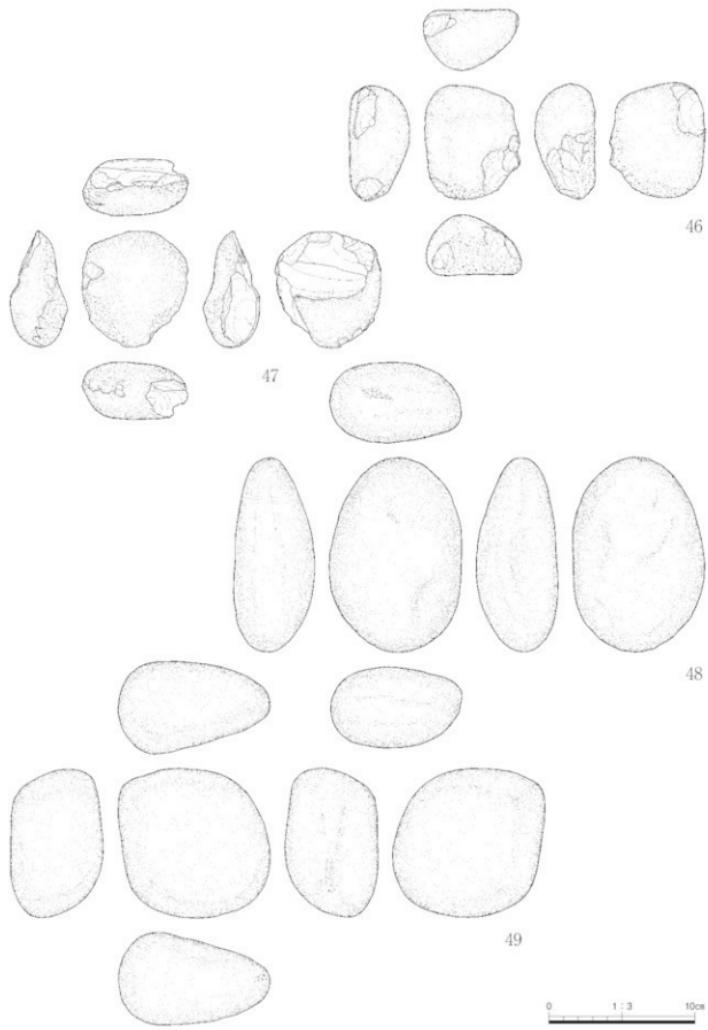
44



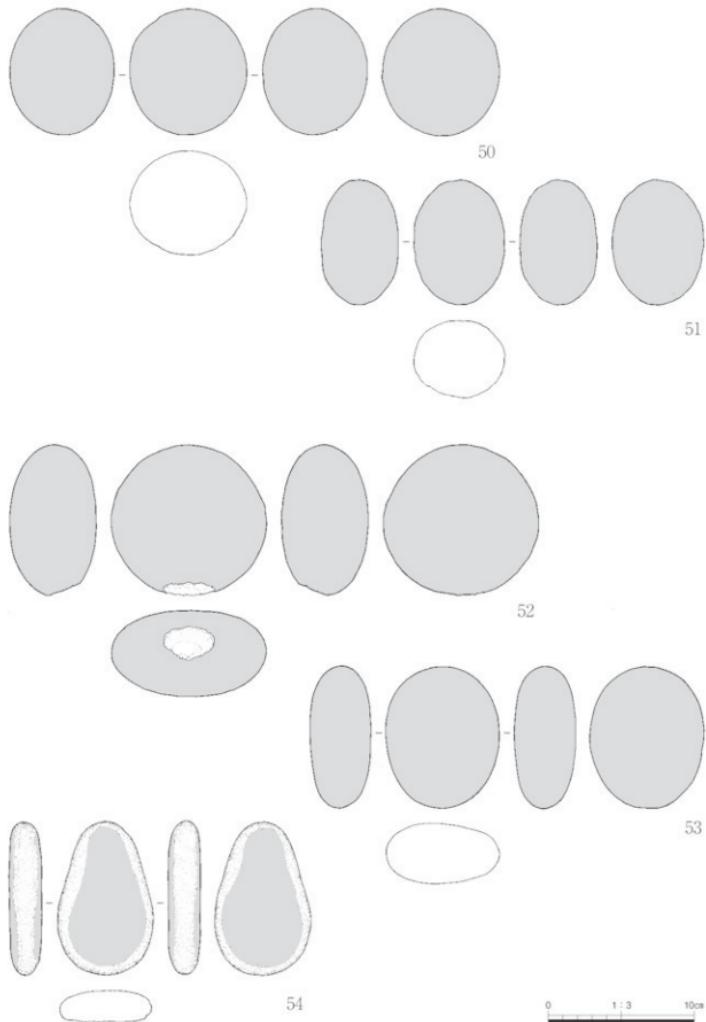
45

A scale bar at the bottom right of the figure indicates a length of 10 cm. The bar is labeled "10cm" and has a scale ratio of "1:3" above it.

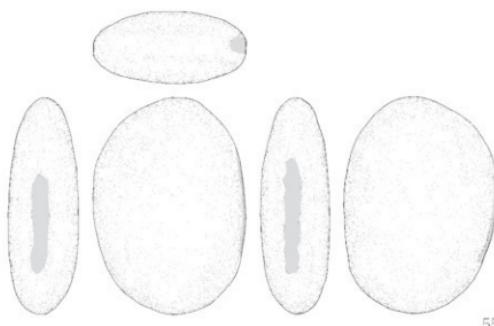
第22図 遺構外出土遺物 石器 39～45



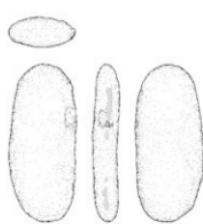
第23図 遺構外出土遺物 石器 46～49



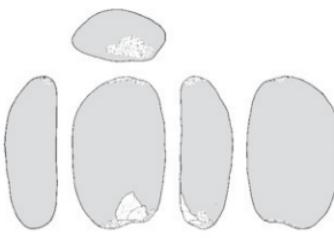
第24図 遺構外出土遺物 石器 50～54



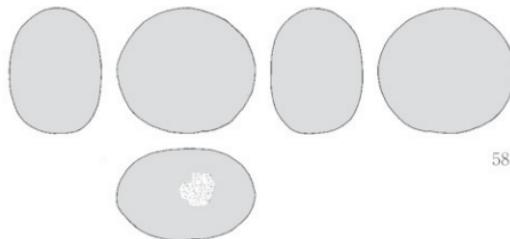
55



56



57



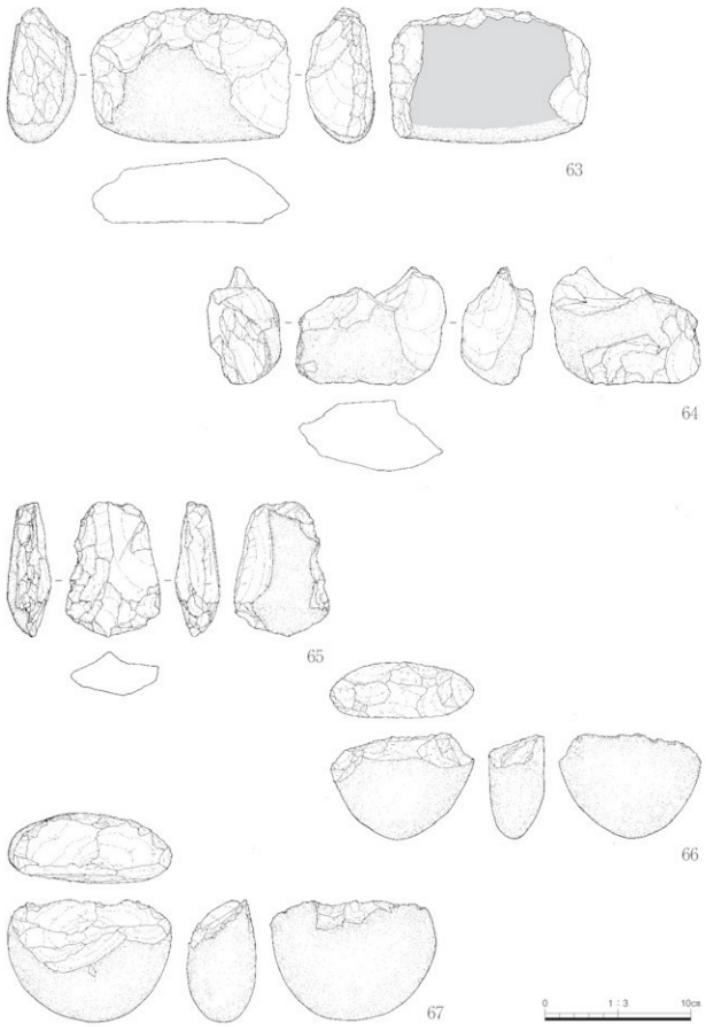
58



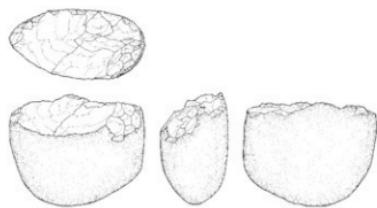
第25図 遺構外出土遺物 石器 55～58



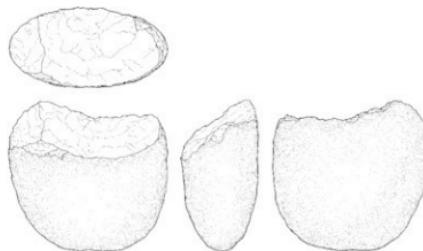
第 26 図 遺構外出土遺物 石器 59 ~ 62



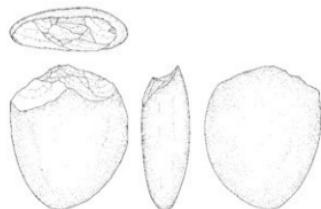
第27図 遺構外出土遺物 石器 63～67



68



69



70



第28図 遺構外出土遺物 石器 68～70

1号竪穴住居跡

No.	層 級	方 位	出土地点・層位	器種・部位	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外 面	内 面	備 考	分類
SI-1	10	8	床面直上付近	深鉢・口縁部～底部	(20.0) <21.9>	36.5 <31.9>	9.0 <11.9>	LR 總底	ナガリ	内面: 化粧物付着 外面: 口縁部から側面にかけて灰化物付着	Ⅱ
SI-2	10	8	室内	深鉢・口縁部	-	-	-	LR 總底	ナガリ	外面灰化物付着	Ⅱ
SI-3	10	8	室内	深鉢・側部～底部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-4	10	8	室内	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-5	10	8	室内	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底 回転文	ナガリ		Ⅱ
SI-6	10	8	室内	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-7	10	8	室内	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-8	10	8	堆積土	深鉢・口縁部	-	-	-	LR 總底 ?	ナガリ	胎土焼締少量混入	Ⅱ
SI-9	10	8	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-10	10	8	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ
SI-11	10	8	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	LR 總底	ナガリ		Ⅱ

2号竪穴住居跡

No.	層 級	方 位	出土地点・層位	器種・部位	口徑 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外 面	内 面	備 考	分類
SI-2-1	13	1号土器埋設部・側 壁	深鉢・口縁部～側部	-	33.1 (19.0)	-	-	口縁部 僅僅に LR 織文側面押圧 RL 織文側面押圧 側部 LR 總底 總底	ナガリ	内面保護付着 胎土焼締少量混入 線状の擦れ痕見出し SI-2-2と同一個体	Ⅲ
SI-2-2	14	1号土器埋設部・側 壁の中央	深鉢・側部	-	(23.3)	-	-	LR 總底 總底	ナガリ	内面: 斜面擦れ痕 牆面等 線状の擦れ痕見出される 側面は側面保護 RL 織文側面押圧	Ⅲ
SI-2-3	14	1号土器埋設部・側 壁内部	深鉢・口縁部直下～ 底部	(20.0)	10.5	-	-	L 織文側面押圧 RL LR 總底 回転文	ナガリ	内面保護付着 胎土焼締微量混入 枕板跡の一箇多量混入	Ⅲ
SI-2-4	14	1号土器埋設部・側 壁	深鉢・側部	-	(20.0)	-	-	r 線路回転文	ナガリ	内面: 斜面擦れ痕 胎土焼締微量混入 枕板跡	Ⅲ
SI-2-5	14	遺構発掘当日 (土質調 整用耙き棒付)	深鉢・側部	-	(20.3)	-	-	LR 總底 LR 織文側面押圧	ナガリ	内面: 爪付着 外面: 灰化物粒物、 屎付着	Ⅲ
SI-2-6	15	1号土器埋設部内	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部・口脣部 LR 織文側面押圧	ナガリ	内面保護付着 胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-7	15	1号土器埋設部内	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部・口脣部 LR 織文側面押圧	ナガリ	胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-8	15	1号土器埋設部内	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部・口脣部 LR 織文側面押圧	ナガリ	内面: 化粧物付着 胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-9	15	1号土器埋設部内	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部・口脣部 LR 織文側面押圧 RL 織文	ナガリ	胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-10	15	1号土器埋設部内	深鉢・側部	-	-	-	-	LR 織文側面押圧	ナガリ		Ⅲ
SI-2-11	15	1号土器埋設部内	深鉢・側部	-	-	-	-	LR 總底 r 線路回転文	ナガリ		Ⅲ
SI-2-12	15	1号土器埋設部内	深鉢・側部	-	-	-	-	LR 總底 r 線路回転文	ナガリ		Ⅲ
SI-2-13	15	1号土器埋設部内	深鉢・側部	-	-	-	-	LR 總底 RL 織文側面押圧	ナガリ		Ⅲ
SI-2-14	15	1号土器埋設部内	深鉢・側部	-	-	-	-	口縁部・口脣部 RL 織文側面押圧	ナガリ	胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-15	15	堆積土	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部 RL 織文側面押圧 RL 總底	ナガリ	胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-16	15	堆積土	深鉢・口縁部	-	-	-	-	R 織文側面押圧	ナガリ		Ⅲ
SI-2-17	15	堆積土	深鉢・口縁部	-	-	-	-	口縁部 RL 織文側面押圧 RL 第1種結実状況文	ナガリ	外側保護付着 胎土焼締微量混入	Ⅲ
SI-2-18	15	1号土器埋設部・レ ンジ内	深鉢・口縁部	-	-	-	-	L 織文側面押圧 円形軋突文	ナガリ	内面保護付着	Ⅲ

第2表 土器観察表(1)

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外　面	内面	備　考	分類
SI 2-19	15	15	堆積土	深鉢・口縁部	-	-	-	L. 織文側面押圧 LR. 横位	ミガキ		Ⅲ
SI 2-20	15	15	1号土器埋設印輪出土面	深鉢・底部	-	-	(16.0) <10.0>	ナマ	内面炭化微粒物、縦付着 沈入	ミガキ	Ⅲ
SI 2-21	15	15	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	L. 肩平縁側面回転文(木口状)	ミガキ	粘土繊維少量混入	Ⅲ
SI 2-22	15	15	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	RL?	ミガキ		Ⅲ
SI 2-23	15	15	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	沈入	ナマ		Ⅲ

SK2 土坑

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外　面	内面	備　考	分類
SK 2-1	18	17	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	多輪踏査跡	ミガキ		-
SK 2-2	18	17	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	RL・LR 第1極結束引目端文	ナマ		-
SK 2-3	18	17	堆積土	深鉢・側部	-	-	-	ナマ			-

遺構外

No	図版	写真	出土地点・層位	器種・部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外　面	内面	備　考	分類
1	19	17	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	沈入	ナマ	粘土繊維少量混入	I
2	19	17	E3 2層	深鉢・口縁部	-	-	-	RL. 横位 端孔	ナマ	粘土繊維少量混入	I
3	19	17	D4 2層	深鉢・口縁部	-	-	-	LR. 横位	不明 (溝跡)	粘土繊維少量混入 口縁平担	I
4	19	17	調査区内表土中	深鉢・側部	-	-	-	RL. 斜位	ナマ	粘土繊維少量混入	I
5	19	17	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	R. 織文側面押圧	ナマ	口縫部先端丸	II
6	19	17	H8 2層	深鉢・口縁部	-	-	-	R. 織文側面押圧 LR. 織文側面押圧 RL. 横位	ミガキ	粘土繊維少量混入	II
7	19	17	G8 2層	深鉢・口縁部	-	-	-	L. 織文側面押圧 内縫利突文	ミガキ	粘土繊維少量混入	II
8	19	17	H6 表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	L. 織文側面押圧	ナマ	粘土繊維微量混入	II
9	19	17	F8 表土中	深鉢・側部	-	-	-	多輪踏査跡	ミガキ	粘土繊維少量混入	II
10	19	17	H6 2層	深鉢・側部	-	-	-	多輪踏査跡	ナマ	粘土繊維少量混入	II
11	19	17	試掘トレンチ	深鉢・側部	-	-	-	多輪踏査跡	ナマ	粘土繊維少量混入	II
12	19	17	試掘トレンチ	深鉢・口縁部	-	-	-	LR. 織文側面押圧 LR. 横位	ナマ	外縫炭化微粒物付着 粘土繊維 微量混入	III
13	19	17	試掘トレンチ	深鉢・口縁部	-	-	-	LR. 織文側面押圧	ナマ	粘土繊維少量混入	III
14	19	17	試掘トレンチ	深鉢・口縁部	-	-	-	琵琶 + LR. 織文側面押圧	ミガキ	粘土繊維微量混入	III
15	19	17	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR. 織文側面押圧	ミガキ	粘土繊維少量混入	III
16	19	17	H9 表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	R. 織文側面押圧	ナマ	内縫: 壁付着 外縫: 炭化微粒 物付着	III
17	19	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR. 織文側面押圧	ナマ	粘土繊維少量混入	III

第2表 土器観察表(2)

No	固 定 部	写 真	出土地点・層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外 面	内面	備 考	分類
18	19	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	波帶 + LR 横文側面押圧	ナゲ	口縁部平頭	Ⅲ
19	20	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR 横文側面押圧	ナゲ		Ⅲ
20	20	18	試掘トレンチ	深鉢・口縁部	-	-	-	LR 横文側面押圧	1ボキ		Ⅲ
21	20	18	試掘トレンチ	深鉢・頭部・胴部	-	-	-	波帶 + LR 横文側面押圧 + LR 横文側面押圧 + LR 横文側面押圧	1ボキ	粘土塊微少量混入	Ⅲ
22	20	F8	トレンチ	深鉢・頭部・胴部	-	-	-	波帶 + LR 横文側面押圧 + LR 横文側面押圧 + LR 横文側面押圧	1ボキ	粘土塊微少量混入	Ⅲ
23	20	18	調査区内表土中	深鉢・頭部	-	-	-	波帶 + LR 横文側面押圧	1ボキ		Ⅲ
24	20	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部直下	-	-	-	LR 横文側面押圧	1ボキ		Ⅲ
25	20	18	試掘トレンチ	深鉢・口縁部直下	-	-	-	沈痕 (横文側面押圧なし?)	ナゲ		Ⅲ
26	20	18	試掘トレンチ	深鉢・胴部	-	-	-	LR 横文側面押圧 + LR (0段多条) 縦肋	1ボキ	粘土塊微微量混入	Ⅲ
27	20	18	調査区内表土中	深鉢・胴部	-	-	-	RL (0段多条) 縦肋・沈痕	ナゲ	外面炭化微粒物付着	Ⅳ
28	20	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR (0段多条) 縦肋	1ボキ		Ⅳ
29	20	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR (0段多条) 縦肋	1ボキ		Ⅳ
30	20	18	調査区内表土中	深鉢・口縁部	-	-	-	LR (0段多条) 縦肋	1ボキ		Ⅳ
31	20	18	調査区内表土中	深鉢・胴部	-	-	-	LR (0段多条) 縦肋	1ボキ		Ⅳ
32	20	18	調査区内表土中	深鉢・胴部	-	-	-	LR (0段多条) 縦肋	1ボキ		Ⅳ

第2表 土器觀察表(3)

1号竪穴住居跡

No	図版	写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
SI-1-12	10	8	堆積土	磨石	研磨花崗岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.81	5.95	4.47	371.30	
SI-1-13	10	8	堆積土	磨石	花崗斑岩	北上山地 I 帯(久喜石体)	中生代 白堊紀前期	9.09	5.81	3.30	258.10	
SI-1-14	10	8	堆積土	磨石	砾灰岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	9.65	5.64	3.22	206.40	

2号竪穴住居跡

No	図版	写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
SI-2-24	16	15	2号上部埋設炉内	石斧	砂岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	17.21	8.21	5.32	1090.00	
SI-2-25	16	15	2号上部埋設炉内	磨石	頁岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	11.93	6.35	3.11	361.70	
SI-2-26	16	15	2号上部埋設炉内	自然縞	花崗閃綠岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.26	6.00	3.58	233.70	
SI-2-27	16	15	2号上部埋設炉内前面	自然縞	花崗閃綠岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	16.28	14.45	4.72	1456.00	
SI-2-28	17	16	1号上部埋設炉喉前面	研磨	ホルンフェルス	北上山地(権市西部)	中生代 白堊紀前期に変成	11.70	5.58	1.70	136.60	
SI-2-29	17	16	堆積土	磨石	砾灰岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	11.16	7.96	2.19	228.30	
SI-2-30	17	16	堆積土	磨石	ハシレイ岩	ノリカケ岩体	中生代 白堊紀前期	8.58	7.32	4.20	446.00	
SI-2-31	17	16	堆積土	磨石	頁岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	5.82	6.17	2.97	114.30	
SI-2-32	17	16	遺構和田面(上層標界付近から中央为止)	自然縞	花崗閃綠岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	50.10	41.84	9.36	2360.00	

遺構外

No	図版	写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
33	21	19	調査区内表土中	石斧	頁岩	北上山地(権市西部)	中生代	2.29	1.23	0.40	1.00	
34	21	19	調査区内表土中	アラシャーバー 型	頁岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	5.01	2.54	1.28	11.50	
35	21	G10 表土中	アラシャーバー 型	赤色頁岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	3.55	2.69	0.72	5.60		
36	21	G7 2層	石斧	研磨花崗 岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	17.37	6.32	4.49	736.00		
37	21	G7 表土中	石斧	ひん岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	15.04	6.00	3.77	49.00		
38	21	調査区内表土中	石斧	花崗閃綠岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	11.65	6.02	2.31	248.00		
39	22	I10 表土中	石斧	ひん岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.27	7.21	4.12	367.50	局部破損	
40	22	G8 表土中	石斧	ディサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.70	5.81	4.46	426.00	局部破損	
41	22	19	調査区内表土中	石斧	研磨花崗 岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.11	4.91	3.49	199.60	局部破損
42	22	19	G8 表土中	石斧	研磨花崗 岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.43	5.84	4.52	251.30	局部破損
43	22	I10 表土中	頭石	研磨花崗 岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.66	6.84	2.68	27.00		
44	22	19	E4 表土	頭石	チャート	北上山地(権市西部)	中生代前期	7.15	5.66	5.67	320.00	
45	22	20	G7 2層	頭石	ハンレイ岩	北上山地(権市西部) ノリカケ岩体	中生代 白堊紀前期	7.98	6.27	2.85	246.80	
46	23	20	F8 トレンチ	頭石	砂岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	7.86	6.50	4.16	289.10	
47	23	20	G7 2層	頭石	頁岩	北上山地(権市西部)	中生代前期	7.99	7.28	3.90	238.00	
48	23	20	G4 表土中	頭石	ハンレイ岩	北上山地(権市西部) ノリカケ岩体	中生代 白堊紀前期	13.39	9.05	5.54	112.00	

第3表 石器観察表(1)

No.	図版 写真	出土地点・層位	器種	石質	産地	生成年代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
49	23	20 調査区内表土中	礫石	頁岩	北上山地（権山西部）	中生代前期	10.19	10.14	6.31	118000	
50	24	20 F4 2層	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.72	8.98	7.21	69000	
51	24	20 調査区内表土中	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.61	6.30	5.34	40000	
52	24	20 1号聖穴住居跡調査区外 墓面下部	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	10.38	10.60	5.97	90000	
53	24	20 E4 表土中	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.76	7.84	4.18	47000	
54	24	21 GB 表土中	礫石	ひん岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	10.57	6.61	2.22	24950	
55	25	21 調査区内表土中	礫石	花崗岩	北上山地Ⅰ帶（久喜岩体）	中生代 白堊紀前期	14.96	10.54	4.26	115000	
56	25	21 F5 表土中	礫石	頁岩	北上山地（権山西部）	中生代前期	10.88	4.55	1.65	13430	
57	25	21 ID 表土中	礫石	ハニレイ岩	北上山地（権山西部）	中生代 白堊紀前期	10.38	6.37	3.51	41000	
58	25	21 HG 表土中	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	8.64	9.55	6.34	76000	
59	26	21 H0 表土中	礫石	デイサイト	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.89	6.87	5.68	54000	
60	26	21 1号聖穴住居跡調査区外 墓面下部	礫石	細粒花崗岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	13.14	8.79	4.02	68000	
61	26	21 GB レンチ	礫器	ホルンフェルス	北上山地（権山西部）	中生代 白堊紀前期に 変成	15.48	6.19	2.90	22710	
62	26	21 調査区内表土中	礫器	頁岩	北上山地（権山西部）	中生代前期	18.45	5.94	1.81	26700	
63	27	21 調査区内表土中	礫器	細粒花崗閃 绿岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.23	13.82	4.61	85000	
64	27	22 調査区内表土中	礫器	ホルンフェ ルス	北上山地（権山西部）	中生代 白堊紀前期に 変成	7.83	9.96	4.86	38660	
65	27	22 GB レンチ	礫器	頁岩	北上山地（権山西部）	中生代前期	9.26	6.50	2.98	18280	
66	27	22 1号聖穴住居跡調査区外 墓面中	礫器	細粒花崗閃 绿岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	7.25	9.73	3.89	28000	
67	27	22 調査区内表土中	礫器	砂岩	北上山地（権山西部）	中生代前期	8.44	11.26	4.79	58000	
68	28	22 試掘レンチ	礫器	ホルンフェ ルス	北上山地（権山西部）	中生代 白堊紀前期に 変成	7.72	9.26	4.79	44000	
69	28	22 調査区内表土中	礫器	細粒花崗岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	10.05	10.77	5.41	75000	
70	28	22 F8 表土中	礫器	細粒花崗閃 绿岩	北上山地	中生代 白堊紀前期	9.86	8.65	3.37	35000	

第3表 石器觀察表(2)

VII. 調査のまとめ

1. 遺構と遺構内出土遺物

(1) 壊穴住居跡

縄文時代の壊穴住居跡が2棟検出された。1号壊穴住居跡は複式炉を有する壊穴住居跡である。また、床面直上付近から粗製の深鉢形繩文土器が出土している。頭部の括れや胴部に最大径を持つ器形などの特徴から、大木10式併行で、最終の段階に位置付けられるものとみられる。焼失した住居跡で、炭化材が出土しており、その内1点の炭化材と石窯炉内から採取した炭化材1点の計2点の放射性炭素年代測定を行った結果、暦年較正年代の中央値で石窯炉内のものは4334calBPで、住居跡内炭化材は4581calBPという年代が示されている。住居跡内の年代測定に使用した炭化材は住居の構築材の可能性が高く、炉内のものは燃焼材の可能性があり、その年代は住居の構築年代或いはそれに近い年代を示しているとみられる。自然化学分析の報告では、帰属する年代は縄文時代中期末葉～後期初頭と想定されるとあり、土器の型式からも中期後葉～後期初頭にかけての時期とみられ、測定結果は矛盾がない数値を示している。

また、住居跡内の18点の炭化材の樹種同定を行っており、広葉樹5分類群（オニグルミ、クリ、サクランボ属、ミズキ属、ウコギ属）と広葉樹の樹皮に同定されている。焼失住居であり炭化材が多量に検出されているが、自然科学分析の報告では、サクランボ属とクリが多くかつ全面に散らばっていることから、比較的強度の高い木材が建築部材として選択・利用されたと推定されている。

2号壊穴住居跡は土器埋設炉に使用された土器の型式から円筒上層a式で、中期初頭に位置付けられる。当住居跡の検出面から縄（SI2-32）が検出された。今回の調査において、調査区内の4箇所に土層観察のための深掘りを行ったが、いずれの深掘りからも瓦戸火山灰噴出後とみられる土石流による多量の大型礫が検出されている。深掘りの中の状況をみると、遺構検出面から約20cm下から縄が多数検出され、それより下の掘り下げが不可能な密度であった。当該地は元来大型の礫が多く、また、平成12年度の発掘調査では旧河川跡が検出され、多量の礫が検出されている。しかしながら本調査区では、遺構検出面ではこの縄（SI2-32）以外の縄は検出されておらず、住居埋没後に人為的に置かれたとみられる状況であり、さらに同じレベル面からは深鉢形繩文土器の上半部（SI2-5）が出土している。縄（SI2-32）が検出された地点は、1号・2号土器埋設炉の南東側、地床炉の直上であった。覆土の堆積状況から縄が置かれた時点では、炉は埋没していない見えない状況であったと考えられる。意図的に炉があった地点に置いたものなのか、この時期の類例を確認できていないが、現時点では住居の廃絶に伴う意図的な行為であったことを完全には否定できないと思われる。

また、土器埋設炉のうち1号土器埋設炉内には覆土のみであったが、2号土器埋設炉には石斧、磨石が入れられていた。その下には被熱して赤色化した自然縄の小縄が1点、その下の床面からは被熱による赤色化した板状の自然縄が1点出土した。石斧と磨石は肉眼観察では被熱した痕跡が認められず、炉の使用時に入れられていた可能性は高くないとみられる。住居跡検出面の縄（SI2-32）と同様に炉の廃絶に伴う処理の行為であったことが考えられるが、それを補うような客観的に示す他の痕跡は住居跡内からは確認されていない。炉の廃絶に伴う処理は関東、中部地方で多数みられ、土器片や縄の出土事例がある。本住居跡の場合は今後の検討課題であるが、現段階では炉の廃絶に伴う処理の行為を完全に否定できないものと考えられる。

この1号土器埋設炉及び2号土器埋設炉であるが、1号土器埋設炉は1個体の深鉢形土器を上半と下半に切断し、上半部の中に下半部を入れ、さらに別個体の深鉢形土器を一番内側に設置した三重の入れ子の状態で、さらに単体の深鉢形土器の胴部を並列させた状態で検出された。円筒下層d式～円筒上層a式の時期において入れ子の状



第29図 平成6年度・12年度・27年度発掘調査 遺構配置図合成

態の炉体検出は幾例はあるが、同一個体を含む三重の入れ子の炉体に単一の炉体が並列した土器埋設炉の検出は、稀有な事例である。

また、1号土器埋設炉の中に堆積していた土壤の微細物の洗い出し、炭化種実の同定を行ったところ、オニグルミ、クヌギークリ、クリ?果皮?、キハダ、草本のヒエの胚乳が検出された。ヒエについては、炉内からの検出であることから、自然科学分析報告の考察にも記載があるとおり、植物質食糧として利用された可能性があるものの1個のみの検出であり、また、保存状態は不良とのことである。炉内の覆土の取り上げについては、土器(SI2-3)の中にあった深さ20cmの約3000cm³の土壤を上から5cm単位に袋に分けて全て取り上げた。ヒエが出土したのは上から5cm~10cmの間の土壤で、やや中央付近である。岩手県内で確實に縄文時代の遺跡から出土した事例は、田野畠村和野I遺跡の焼土遺構があるが、時期は特定されていない。北海道では函館市中野B遺跡での早期中葉の出土事例が最も古く、前期では同市石倉貝塚、ハママス野遺跡、木古内町大平遺跡、中期では函館市白尻B遺跡、大船C遺跡、桔梗2遺跡、余市町フゴッペ貝塚、七飯町鳴川右岸遺跡で出土している。青森県六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡では、堅穴住居跡から出土したヒエ属種子そのものの年代測定が行われており、中期から後期の年代値を示している。ゴゾー遺跡の年代測定では直接ヒエを測定したものではなく、土器埋設炉の中から一緒に検出されたオニグルミが測定対象物であるが、ヒエについてもほぼ同年代を示すものと考えられる。三重の土器埋設炉内からの出土ということと、大型の穀がほとんじてあったことから後世の入り込みの可能性はかなり低いものと考えられる。しかし、この資料だけでの検討はできず、他の遺跡での検出資料の蓄積が必要である。

なお、その1号土器埋設炉から出土したオニグルミ2点の放射性炭素年代測定結果は、暦年較正年代の中央値で5759calBP及び5396calBPという年代を示した。1号土器埋設炉の炉体の土器型式は中期初頭の円筒上層a式に比定されるものである。青森県内では青森市三内丸山遺跡や八戸市篠の沢(3)遺跡など円筒上層a式期の放射性炭素年代測定の事例が多数あるが、それらの事例に鑑みると5396calBPの年代が妥当であると考えられる。

(2) 土坑

今回の調査において、2基検出された。SK1からは遺物の出土はなかったが、SK2からは縄文土器片が出土しており、縄文時代以降の時期の土坑ともみられる。両土坑とも用途は不明である。

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器

今回の調査で出土した遺物は縄文時代前期・中期・後期のものである。過去の調査においては、早期から晩期にかけての土器が出土しており、特に前期の土器の出土量が多い。今回の調査では土器の出土量そのものが少なく、前期の土器の出土も少量であった。

なお、本遺跡の遺構外の遺物において特筆すべく一つとして縄文時代の製塙土器があり、前述のとおり岩手県埋蔵文化財センターによる発掘調査で多量に出土しており、別地点での過去の町教育委員会による試掘調査においても出土している。今回の調査ではSK2-3の破片が無文で表面が剥落し、被熱による変色もみられ製塙土器の特徴を有するものであるが小片であった。出土した土器の全てを確認したが、同様の特徴があるものはこの1点のみであり、本調査区において試掘調査及び発掘調査を通して明らかに製塙土器と特定できるものはなかった。

(2) 石器

過去の発掘調査においても礫石器の占める割合が高かったが、今回の発掘調査でも礫石器の出土の比率が高く、

打製石斧、磨石、敲石、敲磨石、礫器が出土した。特に本遺跡では過去の発掘調査においても、ハンレイ岩の円形・橢円形基調で磨りがみられる礫の周縁に、敲打の痕跡がある敲磨石が多く出土しており、今回も出土している。また、平成6年度の発掘調査ではビエス・エスキュー、打製石斧、礫器の出土量が多く、今回も打製石斧と礫器が多く出土した。現在、表面採集される資料でも礫石器が多く、本遺跡の出土石器の特徴である。

3.まとめ

ゴッソー遺跡の本発掘調査は3次目となる。第29図は各調査において作成された遺構配置図を合成したものである。前回と今回の発掘調査で検出された縄文時代の堅穴住居跡は計6棟である。その内訳は中期初頭が1棟、中期後葉から後期前葉までのものが2棟、中期末葉以降が1棟、後期が2棟で、中期後葉から後期が多く、今回の発掘調査で中期初頭の堅穴住居跡が初めて検出された。草間俊一教授の調査結果の分も含めて前期の土器の出土量が多いものの、当該期の堅穴住居跡は未検出である。堅穴住居跡については過去の発掘調査や試掘調査などから県道の南側に広がることが予測される。

<引用・参考文献>

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「和野I 道跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
- 北上市教育委員会 1991 「龍ノ沢道跡」 北上市文化財調査報告第63集
- 北上市教育委員会 2006 「横町道跡」 北上市埋蔵文化財調査報告第72集
- 青森県教育委員会 1993 「笛ノ沢（2）・道跡VI発掘調査報告書（3）」 青森県埋蔵文化財調査報告書第147集
- 青森県教育委員会 2001 「笛ノ沢（2）・（3）・道跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第305集
- 青森県教育委員会 2003 「笛ノ沢（3）道跡III」 青森県埋蔵文化財調査報告書第346集
- 青森県教育委員会 2004 「笛ノ沢（3）道跡IV」 青森県埋蔵文化財調査報告書第372集
- 八戸市埋蔵文化財調査報告書第89集 2001 「牛ヶ沢（4）道跡II」 八戸市教育委員会
- 八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集 2004 「牛ヶ沢（4）道跡III」 八戸市教育委員会
- 館上市教育委員会 2001 「野坂道跡（1）発掘調査報告書」
- 館上市教育委員会 2002 「附上の道跡」
- 財团法人北海道埋蔵文化財センター 1991 「余市町 フグッペ貝塚」（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第72集
- 財团法人北海道埋蔵文化財センター 1994 「七飯町 晴川右岸道跡」（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第87集
- 財团法人北海道埋蔵文化財センター 1996 「函館市 石倉貝塚」（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第109集
- 財团法人北海道埋蔵文化財センター 1998 「函館市 中野B道跡（Ⅲ）第2分野」
（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第120集
- 公益財团法人北海道埋蔵文化財センター 2016 「木古内町 大平道跡（2）-遺構編-」
（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書第321集
- 函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事務団 2008 「函館市 桜梗2遺跡」
函館市教育委員会・函館市埋蔵文化財発掘調査報告書第3輯
- 南茅部町教育委員会 1998 「大船C道跡」
- 小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」「縦観純文土器」株式会社アム・プロボーション
- 小保内裕之 2008 「縦貫大木系土器（楕円式・最花式・大木10式併行式土器）」「縦観純文土器」株式会社アム・プロボーション
- 北日本縄文文化研究会叢書2・2014 「北日本縄文時代埋設土器・埋設構集成」 北日本縄文文化研究会
- 吉崎昌一 1997 「縄文時代の栽培植物」 第四紀研究36（5）
- 山田悟郎 2005 「北海道の道跡から出土した栽培植物」 小畠弘己編「極東先史古代の穀物」熊本大学埋蔵文化財調査室
- 山田悟郎 2006 「北海道の道跡から出土したヒエ・アワ・キビ」 小畠弘己編「極東先史古代の穀物2」熊本大学埋蔵文化財調査室
- 西本豊弘・三浦圭介・住田雅和・宮田佳樹 2007 「「縄文ヒエ」の年代-吉崎昌一先生を偲んで-」『動物考古学』24
- 小畠弘己 2011 「東北アジア古民族植物学と縄文農耕」 株式会社同成社

付 編

ゴッソー遺跡の自然科学分析

ゴッソー遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに.....	p.58
1. 試料	p.58
2. 分析方法	p.58
1) 放射性炭素年代測定	p.58
2) 炭化材同定	p.58
3) 微細物洗い出し・炭化種実同定	p.59
3. 結果	p.59
1) 放射性炭素年代測定	p.59
2) 炭化材同定	p.61
3) 微細物洗い出し・炭化種実同定	p.63
4. 考察	p.63
引用文献.....	p.65

<表・図版一覧>

表1. 放射性炭素年代測定結果	p.60
表2. 历年較正結果	p.60
表3. 炭化材同定結果	p.61
表4. 微細物洗い出し・炭化種実同定結果	p.62
図版1 炭化材(1)	p.66
図版2 炭化材(2)	p.67
図版3 炭化種実	p.68

はじめに

本分析調査では、岩手県洋野町に所在するゴッソー遺跡の発掘調査で検出された、縄文時代に帰属する堅穴住居跡を対象として、炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を実施し、住居跡の年代や建築材に関する情報を得る。また、埋甕炉として用いられていた土器内より採取された土壤を対象として、微細物洗い出しおよび炭化種実の放射性炭素年代測定・同定を実施し、年代や当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

放射性炭素年代測定は、1号堅穴住居跡の石圓炉内および覆土中より出土した炭化材2点（ともにサクラ属）と、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）より水洗検出された炭化種実（オニグルミ）1点、同じく2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）より水洗検出された炭化種実（オニグルミ）1点の計4点を対象に実施する。炭化材同定は、1号堅穴住居跡から出土した炭化材の中から選択された18点を対象に実施する。微細物洗い出し・炭化種実同定は、1号堅穴住居跡および2号堅穴住居跡の石圓炉や土器埋設炉等から採取した土壤を対象に実施する。

2. 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

分析はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をビンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。（酸-アルカリ-酸処理:AAA処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M～1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料を燃焼してCO₂発生させ、真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹³C濃度(¹³C/¹⁴C)を測定する。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach 1977)。また、曆年較正用に一括まで表した値も記す。

曆年較正用いるソフトウェアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1、較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.2013)である。

2) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・粋目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）や Wheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木

の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3) 微細物洗い出し・炭化種実同定

試料の重量を量り、肉眼観察で確認された炭化物や土器片等の遺物を抽出後、常温乾燥させる。水を満たした容器内に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く搅拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、それぞれ粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や主に2mm以上の炭化材、土器片などの遺物を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や椿坂（1993）、石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数と一部の重量、最大径を計測して、結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数分類群間は、ハイフンで結んで表示する。分析後は、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）と、同じく1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）のオニグルミ2試料全量を放射性炭素年代測定に供し、その他の炭化種実は分類群別に容器に入れて保管する。残試料は、粒径別の重量を一覧表に併記し、袋に入れて保管する。

3. 結果

1) 放射性炭素年代測定

結果を表1に示す。同位体補正を行った年代値は、1号堅穴住居跡石圓炉内の炭化材（サクラ属）が $3,890 \pm 30$ BP、1号堅穴住居跡内の炭化材（サクラ属）が $4,090 \pm 30$ BP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）のオニグルミ核が $5,020 \pm 30$ BP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）のオニグルミが $4,690 \pm 30$ BPである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することによって、曆年代に近づける手法である。較正のもととなる直線は曆時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している）等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13（Reimer et al.2013）である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回はCALIBを用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach 1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようするために、表には丸めない値（1年単位）を記す。

曆年較正の 2σ の結果は、1号堅穴住居跡石圓炉内が $4,414 \sim 4,243$ calBP、1号堅穴住居跡内が $4,806 \sim 4,447$ calBP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）が $5,891 \sim 5,688$ calBP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）のオニグルミが $5,575 \sim 5,319$ calBPである。曆年較正の中央値は、1号堅穴住居跡石圓炉内が4,334calBP、1号堅穴住居内が4,581calBP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）が5,759calBP、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）のオニグルミが5,396calBPである。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種名・部位・状態	処理	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
1号堅穴住居跡 石圓炉内	炭化材（サクラ属）	AAA	3,890 ± 30	-29.88 ± 0.46	3,970 ± 30	IAAA-160001
1号堅穴住居跡内	炭化材（サクラ属）	AAA	4,090 ± 30	-22.71 ± 0.69	4,050 ± 30	IAAA-160002
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）	炭化穀実 (オニグルミ核)	AaA	5,020 ± 30	-25.27 ± 0.50	5,020 ± 30	IAAA-160003
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）	炭化穀実 (オニグルミ)	AaA	4,690 ± 30	-25.5 ± 0.5	4,687 ± 30	pal-10216 TKA-17185

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAA は酸-アルカリ-酸処理、AaA はアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

表2. 増年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	増年較正年代				Code No.
		年代値		相対比	中央値	
1号堅穴住居跡 石圓炉内	3,887 ± 27	σ cal BC 2,456 - cal BC 2,413	cal BP 4,405 - 4,362	0.396		4,334 calBP IAAA-160001
		2 σ cal BC 2,465 - cal BC 2,294	cal BP 4,414 - 4,243	1.000		
1号堅穴住居跡内	4,085 ± 28	cal BC 2,834 - cal BC 2,817	cal BP 4,783 - 4,766	0.159		4,581 calBP IAAA-160002
		σ cal BC 2,664 - cal BC 2,644	cal BP 4,613 - 4,593	0.162		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (深さ0-5cm)	5,018 ± 29	cal BC 2,639 - cal BC 2,576	cal BP 4,588 - 4,525	0.679		5,759 calBP IAAA-160003
		2σ cal BC 2,857 - cal BC 2,811	cal BP 4,806 - 4,760	0.182		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (深さ0-5cm)	4,685 ± 30	cal BC 2,749 - cal BC 2,723	cal BP 4,698 - 4,672	0.043		5,396 calBP pal-10216 TKA-17185
		cal BC 2,699 - cal BC 2,567	cal BP 4,648 - 4,516	0.728		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (半裁西側深さ0-3cm)	4,685 ± 30	cal BC 2,520 - cal BC 2,498	cal BP 4,469 - 4,447	0.046		
		σ cal BC 3,931 - cal BC 3,876	cal BP 5,880 - 5,825	0.511		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (深さ0-5cm)	5,018 ± 29	cal BC 3,806 - cal BC 3,764	cal BP 5,755 - 5,713	0.444		5,759 calBP IAAA-160003
		cal BC 3,723 - cal BC 3,716	cal BP 5,672 - 5,665	0.046		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (半裁西側深さ0-3cm)	4,685 ± 30	2σ cal BC 3,942 - cal BC 3,856	cal BP 5,891 - 5,805	0.447		5,396 calBP pal-10216 TKA-17185
		cal BC 3,841 - cal BC 3,836	cal BP 5,790 - 5,785	0.007		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (半裁西側深さ0-3cm)	4,685 ± 30	cal BC 3,822 - cal BC 3,709	cal BP 5,771 - 5,658	0.546		
		σ cal BC 3,517 - cal BC 3,496	cal BP 5,466 - 5,445	0.226		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (深さ0-5cm)	5,018 ± 29	cal BC 3,459 - cal BC 3,393	cal BP 5,408 - 5,342	0.662		5,759 calBP IAAA-160003
		cal BC 3,388 - cal BC 3,376	cal BP 5,337 - 5,325	0.112		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (半裁西側深さ0-3cm)	4,685 ± 30	cal BC 3,626 - cal BC 3,597	cal BP 5,575 - 5,546	0.085		5,396 calBP pal-10216 TKA-17185
		cal BC 3,476 - cal BC 3,482	cal BP 5,475 - 5,431	0.235		
2号堅穴住居跡 1号土器埋設炉内 (深さ0-5cm)	5,018 ± 29	cal BC 3,476 - cal BC 3,370	cal BP 5,425 - 5,319	0.680		5,759 calBP IAAA-160003
		2σ cal BC 3,517 - cal BC 3,496	cal BP 5,466 - 5,445	0.226		

1) 計算是には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。

2) 計算是には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、増年較正曲線や増年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいうように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値に入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である。5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

6) 中央値は、確率分布曲線の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

2) 炭化材同定

樹種同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹5分類群（オニグルミ・クリ・サクラ属・ミズキ属・ウコギ科）と広葉樹の樹皮に同定された。なお、No 16は、広葉樹の微細片であるが、観察範囲が狭く、道管配列の特徴等が観察できないため、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、道管は単独または2～6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

・ミズキ属 (*Cornus*) ミズキ科

散孔材で、道管は単独または2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・ウコギ科 (Araliaceae)

環孔材で、孔圈部は接線方向にやや疎な1列、孔圈外で急激に径を減じたのち、2～4個が放射方向、斜方向等に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-30細胞高。

道管配列の特徴から、タカノツメあるいはコシアブラと考えられるが、微細片で保存状態も悪いために区別できず、ウコギ科とした。

・広葉樹の樹皮

組織は、軸方向組織と放射組織で構成される。軸方向組織は、師管、伴細胞、じん皮細胞、スクレレイド、師部柔細胞等で構成される。師管は、接線方向に並ぶ傾向がある。放射組織は比較的大型である。

師管を持つ特徴から広葉樹の樹皮と判断される。師管の配列は、コナラ属やケヤキに似ているが、種類を特定することはできなかった。

表3. 炭化材同定結果

遺構	番号	形状	種類	備考
1号 壁穴住居跡	No 1	破片	サクラ属	年代測定
	No 4	破片	オニグルミ	
	No 10	破片	サクラ属	
	No 11	破片	クリ	
	No 13	破片	サクラ属	
	No 16	微細片	広葉樹	
	No 17	微細片	クリ	
	No 35	破片	サクラ属	
	No 39	板目状	広葉樹の樹皮	
	No 42	破片	クリ	節付近
	No 47	微細片	ウコギ科	
	No 50	破片	ミズキ属	
	No 52	破片	サクラ属	
	No 55	微細片	クリ	
	No 56	破片	クリ	
	No 58	微細片	ウコギ科	
	No 66	破片	サクラ属	年代測定
No 71	微細片	ウコギ科		

表4. 微細物洗い出し・炭化種実同定結果

3) 微細物洗い出し・炭化種実同定

結果を表4に示す。また、炭化種実各分類群の写真を図版3に示して同定根拠とする。

土壌38試料全量8762gを洗い出した結果、被子植物6分類群（落葉広葉樹のオニグルミ、クスギークリ、クリ、キハダ、ミズキ属、草本のヒエ？）61個の炭化種実が抽出・同定された。19個は保存状態が不良で同定ができず、不明炭化物としている。炭化種実以外は、炭化材が2.1g、炭化材主体が6.6g、菌核が2個、骨片が2個、巻貝類が1個、土器片が64個、被熱土器片？主体が102.4g、砂礫類が410.7g、炭化していない植物片（イネ科果実、スベリヒユ種子、エノキギサ種子を含む）が0.03g確認された。

炭化種実群は、主に2号堅穴住居跡の土器内より得られ、落葉高木のオニグルミの核が45個0.04g、オニグルミ？の核が3個0.01g、クスギークリの果実が1個、クリ？の果皮？が2個、キハダの種子が8個、ミズキ属の核が1個と、混生草本で栽培の可能性があるヒエ？が1個確認された。オニグルミの核の破片が最も多く、炭化種実群全体の約8割を占める。このうち、1号土器埋設が5-10cmより確認されたヒエ？の胚乳は、長さ1.7mm、幅1.3mm、残存厚1.0mmを測る。

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果、1号堅穴住居跡の石圓炉内から採取した炭化材の年代値は、曆年較正の中央値で4.334calBPを示す。また、1号堅穴住居跡の住居内から採取した炭化材の年代値は4.581calBPを示す。このことから、本分析調査の結果では、1号堅穴住居跡の帰属する年代は、縄文時代中前期～後期初頭頃と想定される。

一方、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（深さ0-5cm）から採取されたオニグルミの年代は、曆年較正の中央値で、5.759calBPを示す。また、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）のオニグルミの年代は、曆年構成の中央値で、5.396calBPである。2点の試料について、年代幅が確認されたが、現地調査所見による土器型式から検討すると、1号土器埋設炉内（半裁西側深さ0-3cm）が示す値が、2号堅穴住居跡の年代を示すものと考えられる。のことから考えると2号堅穴住居跡の年代は、縄文時代中期初頭頃と考えられる。

1号堅穴住居跡から出土した炭化材は、住居の床面上から出土している。この中には、No.10.11.19.50など、住居の中央から外側に向かって放射状に出土しているものもあり、垂木などの建築部材に由来する可能性があるが、破片や微細片になっている資料も多く、部位や本取りの詳細は不明である。

これらの炭化材は、樹種同定の結果から合計5種類の木材と広葉樹の樹皮が確認された。各種類の材質等についてみると、オニグルミ、クリ、サクランボ属、ミズキ属は比較的の重硬で強度が高い。ウコギ科（タカノツメまたはコシアブラ）は、軽軟な部類に入り、強度は低い。

18点の結果をみると、サクランボ属とクリが比較的多く、次いでウコギ科となり、他にミズキ属、オニグルミが混じる。サクランボ属やクリの分布状況を見ると、調査範囲の全面に散っており、1箇所に集中するような傾向は見られない。そのため、サクランボ属やクリには、異なる複数の部材が混在している可能性がある。これらの点を考慮すると、クリやサクランボ属を中心として、比較的強度の高い木材を建築部材として選択・利用したことが推定される。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、周辺では、本遺跡と同じく沿海地に位置する大石平遺跡（1）および富ノ沢（2）遺跡（青森県六ヶ所村）、丹後谷地遺跡（青森県八戸市）で縄文時代中期～晚期の住居跡出土炭化材について樹種同定が実施されている。また、内陸部になるが、田中遺跡や御所野遺跡（一戸町）で縄文時代中期～後期の住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されている。これらの結果をみると、遺跡によって多少の違いはあるが、基本的にクリを中心とした種類構成が認められる。確認されている樹種には、今回と共に通の種類も多く、本遺跡でも同様の木材が利用されていたことが推定される。

1号堅穴住居跡や2号堅穴住居跡の各地点・層位より採取された土壤を対象として、微細物洗い出しを実施し

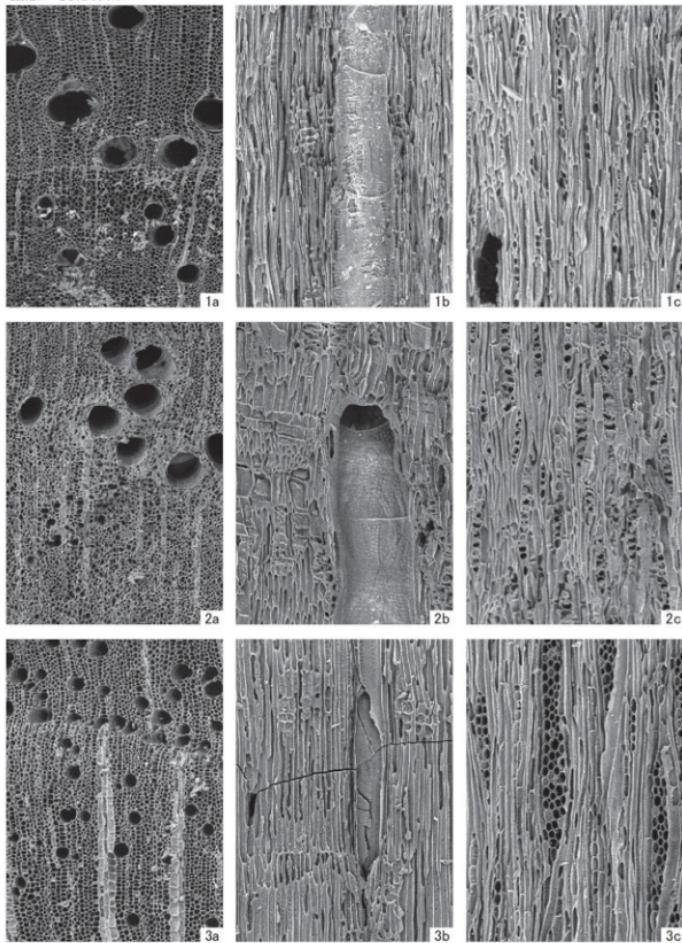
た結果、主に2号堅穴住居跡の土器内より、落葉広葉樹で高木になるオニグルミ、クスギークリ、クリ、キハダ、ミズキ属と、草本のヒエ？から成る炭化種実群が得られた。オニグルミ、キハダ、ミズキ属は河畔林要素で、クスギやクリは二次林要素である。これらの樹種は、現在の本地域にも分布しており、当時の遺跡周辺域の落葉樹林に生育していたと考えられる。また、最も多く確認されたオニグルミは、核内の子葉が食用可能である。出土炭化種片は、周辺の落葉樹林から持ち込まれ、食用のために中の子葉を取り出した後の食料残滓と示唆され、火を受けたとみなされる。この他、クリは果実内部の子葉が食用可能で、クスギはあく抜きを施することで子葉が食用可能となる。これらの堅果類も、オニグルミとともに利用された可能性がある。

ところで、2号堅穴住居跡の1号土器埋設炉深さ5~10cmより確認されたヒエ？について、植物質食糧として利用された可能性も考えられるものの、1個のみの出土であり、なおかつ保存状態が不良であることから疑問符を付した。今後の資料蓄積を待ち、慎重に検討する必要がある。

<引用文献>

- 林 哲三.1991.日本産木材 細微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- Hua, Q., Barbetti, M., and Rakowski, A. J. 2013. Atmospheric Radiocarbon for the Period 1960–2010. *Radiocarbon* 55:2059–2072.
- 石川茂雄.1994.原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会.328p.
- 伊東隆夫.1995.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料.31.京都大学木質科学研究所.81–181.
- 伊東隆夫.1996.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料.32.京都大学木質科学研究所.66–176.
- 伊東隆夫.1997.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料.33.京都大学木質科学研究所.83–201.
- 伊東隆夫.1998.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料.34.京都大学木質科学研究所.30–166.
- 伊東隆夫.1999.日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料.35.京都大学木質科学研究所.47–216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編).2012.木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社.440p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志.2010.日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大出版会.678p.
- 小畠弘己.2011.東北アジア古民族植物学と織文農耕.同成社.309p.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 55:1869–1887.
- 鳥地 謙・伊東隆夫.1982.図説木材組織.地球社.176p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A. 1977. Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, 355–363.
- 鈴木康夫・高橋 冬・安延尚文.2012.木イチャーウォッキングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一日でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社.272p.
- 椿坂恭代.1993.アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」261–281.
- Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (編).1998.広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語訳監修).海青社.122p. [Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化材(1)



1.オニグルミ(1号竪穴住居跡No.4)

2.クリ(1号竪穴住居跡No.42)

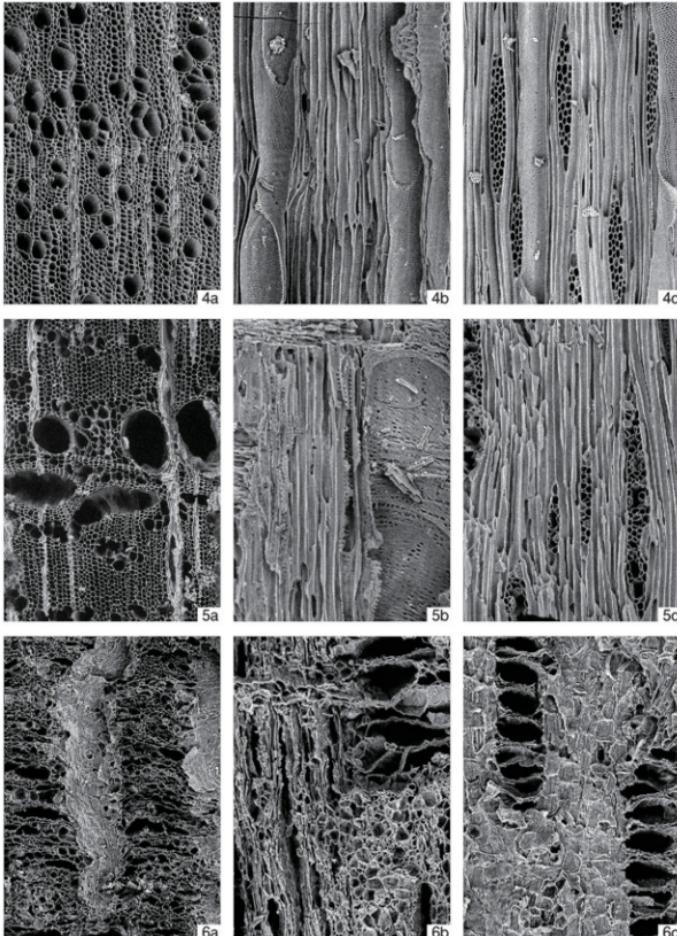
3.サクラ属(1号竪穴住居跡No.35)

a:木口;b:征目,c:板目

100 μm:a

100 μm:b,c

図版2 炭化材(2)



4.ミズキ属(1号竪穴住居跡;No50)

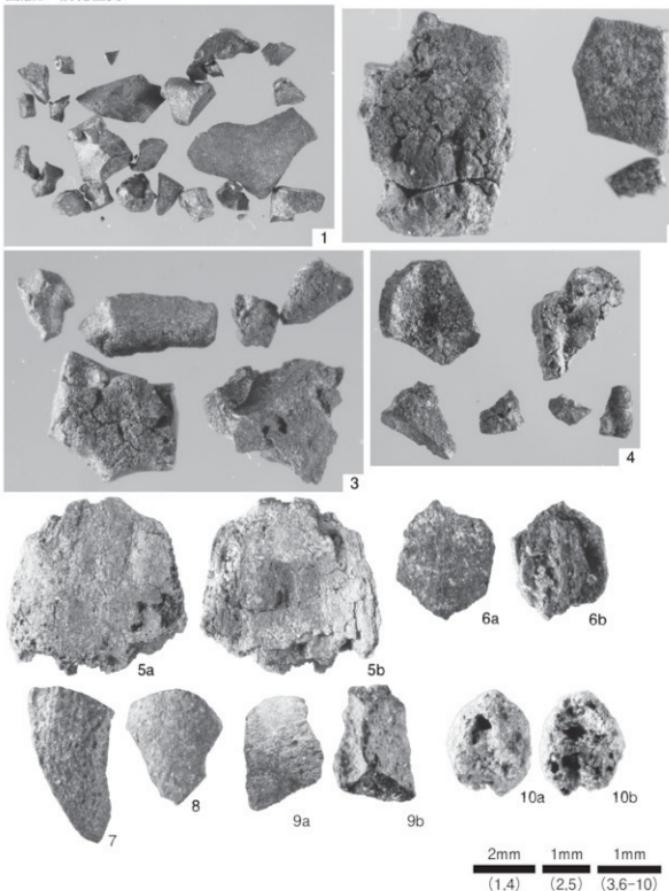
5.ウコギ科(1号竪穴住居跡;No47)

6.広葉樹の樹皮(1号竪穴住居跡;No39)

a:木口,b:粧目,c:板目

— 67 —
100µm:a
100µm:b,c

図版3 炭化種実



1. オニグルミ 核(年代測定) (2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ0-5cm)
2. オニグルミ 核(年代測定) (2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 半裁西側 深さ0-3cm)
3. オニグルミ 核(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ10-15cm)
4. オニグルミ 核(2号竪穴住居跡 2号土器埋設炉土器内土 半裁西側)
5. クヌギクリ 果実(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ15-20cm)
6. クリ? 果皮?(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 半裁東側 深さ10-15cm)
7. キハダ 種子(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ10-15cm)
8. キハダ 種子(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ10-15cm)
9. ミズキ属 核(2号竪穴住居跡 2号土器埋設炉土器内土 半裁西側)
10. ヒエ 脱乳(2号竪穴住居跡 1号土器埋設炉土器内土 深さ5-10cm)

